

佐藤モニカ歌集『白亜紀の風』

森屋めぐみ

子とやんばるとルーツと

・夏の日は白亜紀もまた近くなりとほくに
恐竜生れし声聞く

・空へ扉はすべて開かれ駆け抜ける風あり
これは白亜紀の風

白亜紀は海が広がり豊かな植物が地表を
覆い、アンモナイトや恐竜が栄え滅びた進
化の時代。著者の第二歌集のタイトルは先
の二首に拠り、遙かなものへの憧れ、希望
への羽ばたきが進められているとあとがき
にある。湿度と解放感が共存する南の風の
匂いが、歌集への期待感を高めてくれる。

佐藤モニカの歌には三つの柱がある。

- ・をさなごをひきよせねむるこの夕べ銀河
にふたりつま先濡らす
- ・月をまだ平たきものと思ひゐるをさなご
の描く月のしづけさ
- ・唐突にかなしいといふをさなごでその悲
しみをいかにせむ母は

・をさなごの言の葉はまだやはらかくひと
ひらふたひら手のひらに受く

一つ目は息子さんの歌。第一歌集『夏の
領域』では「みどりご」だったお子さんも「を
さなご」に成長した。日々その世界を広げ
てゆく子供に母として温かく寄り添いなが
ら、詩として昇華させるため、歌人の眼を
持つて俯瞰して見ている。単なる子育ての
歌とは一線を画す感性である。

・鳥のこゑいつばい詰めてやんばるのわれ
の両耳やはらかくあり

・観光バス次々と過ぎわれもまた見らるる
土地の一人となりぬ

・黒糖を溶かして思ふすんなりと消えざ
るものがこの島にある

・失ふと聞けばますます澄みとほる海かも
しれず 辺野古の海よ

二つ目は居住地、沖縄の歌。やんばるの
地での日常を詠んだ歌も多くあり、その自
然の豊かさは南国の風景として生き生きと
たち上がってくる。その一方で、基地の間
題も少なからず影を落とす。二つの側面を
詠むことは、沖縄に住むようになったこと

で得られた大きなテーマと言えよう。

・蜘蛛の巣のやうに行き交ふ紙テープその
奥処には移民船あり

・帰化はせず一生終へむとする母の長き名
前の隙間に星は

三つ目は自身のルーツを詠んだ歌。移民
としてブラジルに渡った曾祖母から繋がる
血脈もまた、他者には詠めないテーマであ
る。一見、淡々と詠んでいるようだが、そ
の実ファミリーツリーの一員として深い思
いを持っていることが伝わってくる。

他にもところどころに登場するかの夫君
(ユーモラスに詠まれているのは狙いだろ
う)、真打になられた落語家の弟、玉屋柳
勢師の歌も印象に残る。自然詠、時事詠を
詠みつつ、歌人・佐藤モニカが本当に短歌
に込めているものは、「我」を含めた人間
そのものなのだと思う。愛しさ、悲しさ、
滑稽さ、時には葛藤を必要とするダークな
面をすべて引き受けて短歌にしていけること
は、覚悟を決めなければいけないことではな
い。栗木京子さんが帯に「静かな混沌を獲
得したのだ」と書かれているのはそういう
意味もあるのだろう。「白亜紀」の次の時
代の扉は、すでに開かれているに違いない。